

中 南 部 (7)

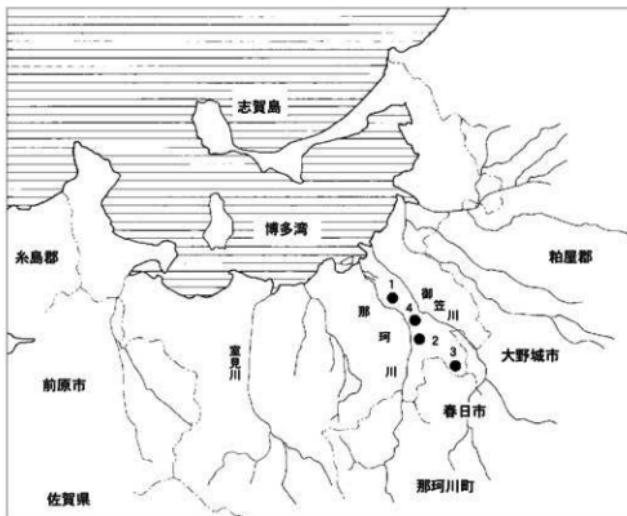
— 福岡市博多区・南区所在遺跡の調査 —

2004

福岡市教育委員会

中南部（7）

—比恵遺跡群第68次調査、五十川遺跡群第9次調査、雜餉隈遺跡群
第12次調査、那珂遺跡群第87次調査の記録—



	調査番号	遺跡略号
1. 比恵遺跡群第68次調査	9912	HIE-68
2. 五十川遺跡群第9次調査	0215	GJK-9
3. 雜餉隈遺跡群第12次調査	0223	ZSK-12
4. 那珂遺跡群第87次調査	0258	NAK-87

序

玄界灘を挟んで大陸とは一衣帶水の位置関係にある福岡市は、古くから大陸文化の受入れ窓口として栄えて来た地域で、各時代の重要な遺跡が数多く分布しています。

特に、福岡市の中心部を南北に流れる那珂川流域の博多区・南区と南に隣接する春日市にかけては弥生時代の「奴国」の中心地域であり、博多区の那珂遺跡や比恵遺跡、板付遺跡、南区の井尻B遺跡など著名な弥生遺跡が集中しています。

本書は、平成11年度から14年度にかけて、この博多区・南区で個人住宅建設などの小規模な民間開発に伴って、福岡市教育委員会が国から補助を受けて、記録保存のために行った緊急発掘調査の調査報告書です。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解とご認識を深める一助になり、また研究資料としてご活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで原作者の皆様をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例　　言

- (1). 本書は、福岡市博多区と南区内で個人住宅建設など民間の小規模開発に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助を得て実施した緊急発掘調査の報告書である。
- (2). 本書には、平成 11 年度実施した比恵遺跡群第 68 次調査と平成 14 年度実施した五十川遺跡第 9 次調査、雑餉隈遺跡群第 12 次調査、那珂遺跡群第 87 次調査の記録を収録する。調査担当者は以下のとおりである。
- 比恵遺跡群第68次調査 埋蔵文化財課調査第2係 山崎 龍雄
五十川遺跡群第9次調査 埋蔵文化財課調査第2係 山崎 龍雄
雑餉隈遺跡群第12次調査 同 課調査第2係 松浦一之介(現第1係)
那珂遺跡群第87次調査 同 課調査第2係 井上 薫子(現事前審査係)
- (3). 本書掲載遺構の実測と浄書、写真撮影は各調査担当者が行い、五十川第9次調査の遺構実測については瀬戸啓治、藤野雅樹の協力を得た。
- (4). 本書に掲載遺物の実測と浄書と写真撮影は各担当者の他、雑餉隈遺跡群第 12 次調査の遺物実測は山口裕平(福岡大学大学院生)の協力を得た。
- (5). 本書で使用した方位は磁北と座標北がある。その偏差は西偏 $6^{\circ} 30'$ である。五十川遺跡群第 9 次調査で使用した座標については国土座標 第 II 系を使用している。
- (6). 本書の執筆は各調査担当者が行い、その文責は各担当者にある。全体の編集は山崎が行った。
- (7). 本書に関わる図面・写真・遺物は、すべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

本文目次

本文頁

I. 比恵遺跡群第 68 次調査	
第1章 はじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査の組織	1
第2章 調査の記録	1
1 遺跡の立地	1
2 発掘調査の概要	2
3 遺構と遺物	3
II. 五十川遺跡群第 9 次調査	
第1章 はじめに	13
1 調査に至る経過	13
2 発掘調査の組織	13
第2章 調査の記録	14
1 遺跡の立地	14
2 発掘調査の概要	14
3 遺構と遺物	15
4 小結	20
III. 雜餉隈遺跡群第 12 次調査	
第1章 調査の概要と調査体制	25
第2章 調査の記録	27
1 遺跡の立地と歴史的環境	27
2 奈良時代の遺構と遺物	27
3 まとめ	30
IV. 那珂遺跡群第 87 次調査	
第1章 はじめに	31
1 調査にいたる経過	31
2 調査体制	31
第2章 調査の記録	32
1 遺跡の立地	32
2 遺構と遺物	34
3 まとめ	34

挿図目次

本文頁

I. 比恵遺跡群第 68 次調査	
挿図目次	
Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査地点位置図 (1/8,000)	3
Fig. 3 第 68 次調査区遺構全体図 (1/200)	4
Fig. 4 SC02 (1/60)	4
Fig. 5 SD01 (1/60)	5
Fig. 6 SD01 出土遺物 I (1/3)	6
Fig. 7 SD01 出土遺物 II (1/3・1/4)	7

Fig. 8 SD01 出土遺物Ⅲ、攪乱出土遺物 (1/3)	8
図版目次	
PL. 1 (1) I 区全景(西から) (2) II 区全景(東から)	9
PL. 2 (1) SC02(東から) (2) 同東壁土層(西から) (3) SD01(東から) (4) 同土層(西から)	10
PL. 3 各遺構出土遺物(縮尺不統一)	11
II. 五十川遺跡群第 9 次調査	
挿図目次	
Fig. 1 調査地点位置図 (1/5,000)	14
Fig. 2 第 9 次調査区遺構全体図 (1/200)	15
Fig. 3 SK03 (1/20)	16
Fig. 4 各壁土層図 (1/60)	17
Fig. 5 SK03・06 出土遺物、SD01 出土遺物 I (1/3・1/4)	18
Fig. 6 SD01 出土遺物 II、SK06 出土遺物 (1/3・1/1)	19
図版目次	
PL. 1 (1) 調査区遠景(南から) (2) 調査区全景(南から)	21
PL. 2 (1) SK03(東から) (2) SD01・SK06・08(南東から) (3) SD01 東壁土層(西から) (4) 北側段落ち部(南西から)	22
PL. 3 各遺構出土遺物(縮尺不統一)	23
III. 雜餉隈遺跡群第 12 次調査	
挿図目次	
Fig. 1 雜餉隈遺跡群調査地点位置図 (1/5,000)	25
Fig. 2 第 12 次調査地点調査区位置図 (1/500)	26
Fig. 3 第 12 次調査地点遺構配置図(縮尺 1/100)	27
Fig. 4 SC01・02・07 竪穴住居址実測図及び土層断面図(縮尺 1/40)	28
Fig. 5 第 12 次調査地点出土遺物実測図(縮尺 1/3)	29
図版目次	
PL. 1 第 12 次調査地点東半調査区全景(西から)	27
PL. 2 第 12 次調査地点西半調査区全景(東から)	27
PL. 3 SC-01 遺物出土状況(西から)	28
PL. 4 SC-02 遺物出土状況(南から)	28
IV. 那珂遺跡群第 87 次調査	
挿図目次	
Fig. 1 周辺の調査地点 (1/4,000)	31
Fig. 2 調査区の位置 (1/400)	32
Fig. 3 遺構平面図 (1/30)	33
Fig. 4 溝・住居址実測図 (1/40, 1/30)	34
Fig. 5 滑石製石丸玉実測図 (1/1)	34
図版目次	
Ph. (1) 調査区全景(東から)	35
Ph. (2) 調査区全景・貼床除去後(東から)	35
Ph. (3) SC05(北から)	35
Ph. (4) SC05・貼床除去後(北から)	35
Ph. (1) SC04(北から)	36
Ph. (2) SC04・貼床除去後(北東から)	36
Ph. (3) 調査作業をされた方々	36

ひえ I 比恵遺跡群第68次調査

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経過

平成10(1998)年10月12日、地権者の木原豊喜氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区駅南3丁目3番33号に共同住宅建設の為の埋蔵文化財事前調査願いが提出された。申請地は弥生時代の著名な集落遺跡である比恵遺跡群内に含まれ、隣接地でもこれまで数次の発掘調査が実施されていた。埋蔵文化財課としては事前調査が必要であるとし、旧家屋の解体後、試掘調査を行った。試掘調査の結果、申請地は家屋解体時にかなり遺構面の破壊を受けていることが判明したが、部分的に遺構が残っていたため、地権者側と協議を行い、発掘調査は原因者負担と国庫補助金で、報告書については国庫補助事業として調査を行うこととなった。

発掘調査は平成11年5月17日から6月18日まで行った。調査はバックホーによる表土除去から始めたが、排土が場内処理のため、調査は半分ずつ行った。調査対象面積は397m²であったが、遺構面が2mと深いことから、安全措置として境界から引きを取った範囲設定をしたので、実際の調査面積は284m²と減少した。

現地での発掘調査に当たっては、事業主体である木原豊喜氏をはじめとして関係の皆様に、調査についてのご理解を得るとともに、多大なご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

2. 発掘調査の組織

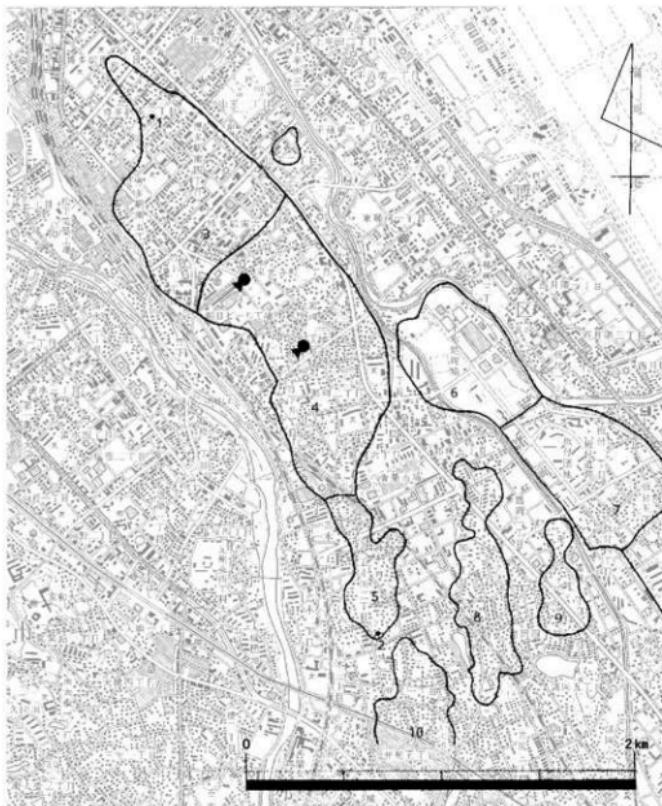
事業主体	木原 豊喜		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	西 憲一郎 (当時)
調査総括	同	埋蔵文化財課長	山崎 純男
	同	調査第2係長	力武 卓治 (前任)
	同	同	田中 寿夫 (後任)
調査庶務	同	文化財整備課管理係	谷口真由美 (前任)
	同	同	御手洗 清 (後任)
調査担当	同	埋蔵文化財課調査第2係	山崎 龍雄
調査・整理作業	阿部幸子 植松雅子 大橋由美子 奥田弘子 清永啓子 武田言示 寺岡恵美子 宮本央雄 室英二 安高精一 安高久子 山下嘉人 (五十音順)		

第2章 調査の記録

1. 遺跡の立地 (Fig. 1)

調査地が立地する比恵遺跡群は那珂川沿いを北に延びる低丘陵の先端部に立地し、この低丘陵には幾筋もの浅い谷が入り込んでいる。比恵遺跡群はこの低丘陵上を北西に広がる範囲で、第68次調査区はその北側に立地する。平成15年時点での調査個所は80箇所を超える。比恵遺跡群は北部九州の著名な弥生集落遺跡で奴國の中心集落の一つであり、また古墳時代後期から古代にかけては那津官家と思われる大型建物遺構が検出されている。

周辺の調査例では、北側第4次調査区では高所部に弥生時代の甕棺墓地や貯蔵穴、低地部に川跡な



1. 比恵第68次地点 2. 五十川第9次地点 3. 比恵遺跡群 4. 那珂遺跡群 5. 五十川遺跡群
6. 那珂君体遺跡群 7. 板付遺跡 8. 諸岡A遺跡群 9. 諸岡B遺跡群 10. 井尻B遺跡群

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

ど、東側の第25次調査区、南東側の第24次調査区では高所部で弥生時代前期の住居跡、低地部では土坑や木器貯蔵施設などが検出されるなど、周囲では弥生時代から古墳時代にかけての集落構造が確認されている。

2. 発掘調査の概要 (Fig. 2・3、PL. 1)

第68次調査区は比恵遺跡の北側に位置し、現地表高は約5mを測る。調査前は家屋が建てられていた。調査は平成11年5月11日の重機による表土除去作業から始めた。事前調査では解体時にかなり遺構の破損を受けており、また遺構面の深さが2mと深いということであった。調査による堆土は場内処理ということだったので、西側をI区、東側をII区として調査区を設定して作業を行った。

I 区遺構面までの深さは2~2.5mで、堆積土は均一な搅乱土で、本来の堆積土は存在しなかった。遺構面は明赤褐色のローム粘土であるが削平がひどく、遺構は全く確認出来なかった。終了時に西側境界地で本来の遺構面の確認を行ったが、境界地の0.5m内側まで搅乱を受けていた。

II 区こちらも搅乱をひどく受けていたが、辛うじて調査区中央部約5×4.5mの範囲で本来の遺構面を確認した。遺構面までの深さは0.7m程で、遺構面は暗赤褐色ローム粘土である。この遺構面で、幅2~2.5mを測る溝1条と、北西側境界で竪穴住居跡の一部を確認した。最後に東側境界地に試掘トレンチを設定し、土層観察で住居跡の規模が直径約7mであることを確認した。東側の第25次調査区で確認された円形住居跡とはほぼ同時期のものと思われる。また溝も第25次調査区から続くもので、近代の時期である。出土遺物は主に溝からの出土で、弥生時代から近代にかけての様々な遺物が出土している。

3. 遺構と遺物

①竪穴住居跡 (SC)

SC02 (Fig. 4, PL. 2) II 区東壁沿いで検出した、半分は敷地外である。残りが悪く壁の一部と柱穴1基しか残っていない。東壁断面観察から規模は推定で7m余りである。第25次調査区の住居とは別のものと思われる。埋土は暗赤褐色地山鳥栖ロームブロックに黒褐色粘質土を混入する。

出土遺物は土器の細片と石器細片が僅かに出土したのみである。

②溝状遺構 (SD)

SD01(Fig. 5, PL. 2) II 区で検出した南北から北東方向の溝、確認規模は4.5m、幅2~2.4m、深さは0.6m余りを測る。埋土は上層が埋立て土で、中間がヘドロ、下層は砂で、水が流れている状況を示す。南壁沿いに杭や横板が残っており農業用水路と思われ、北側には水の取り入れ口と思われる落ち込みがあった。出土遺物と戦前の地図から見て、戦前の区画整理事業で埋立てられたものであろう。

出土遺物 (Fig. 6~8, PL. 3) 弥生時代中期初めの弥生土器から、近代の陶磁器などの各遺物が多量に出土している。中心は19世紀以降である。他に木製品やガラス製品、黒曜石片など種々複雑なものがある。溝は19世紀には、既に存在していたと思われる。

1~5は上層出土。1~4は染付磁器でいずれも19世紀中頃の幕末期である。1・2は湯呑み碗。1は1/4片。復元口径10cm、器高5.9cmを測る。高台疊付は磨り、見込みに砂粒が付着する。肥前磁器か。2は1/2片で、復元口径6.2cm、器高5.9cmを測る。青と朱色による草花文様が入る。3・4は小皿。3は型打ちの菊皿2/3片。復元口径は10.3cm、器高2.5cmを測る。口縁部に鉄朱による口紅があり、見込みには山水楼閣・網・荒磯が描かれる。肥前磁器か。4は3/4片で、口径9.5cm、器高2.2cmを測る。見込みには白化粧土が輪状にかかり、疊付きは

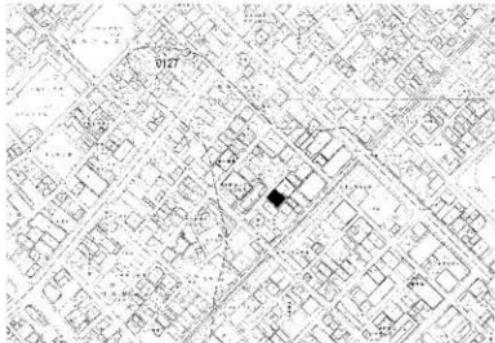


Fig. 2 調査地点位置図 (1/8,000)

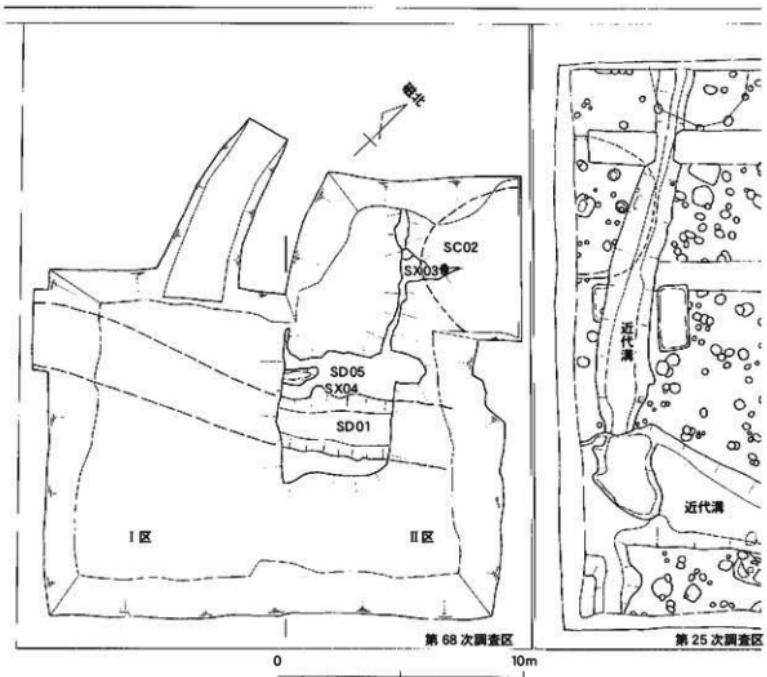


Fig. 3 比恵遺跡群第68次調査区遺構全体図 (1/200)

軸を挿き取る。肥前磁器か。5は玩具の泥面子である。直径2.4cm。厚み0.5cmを測る。6は中層出土。陶器製の灯火具の秉燭。暗オリーブ軸がかかるが、底部は上げ底で受胎。底径3.6cm。受皿部の口径は7.6cmを測る。皿部内面は油が染み込み黒褐色を呈す。

7~26は下層出土。7~19は磁器。7は小碗1/2片で、復元口径6.3cmを測る。内面は光沢を持った透明軸、外表面は緑灰色軸がかかる。疊付きは露胎で磨り。8・9は染付。8は小碗底部1/3片。体外面二条の界線と草花が描かれ、高台内には銘が入る。9は1/5片で、復元口径11.2cm、器高4.8cmを測る。体外面から内面見込みには色合いが均一の型紙刷りの文様が入る。10~15は皿。

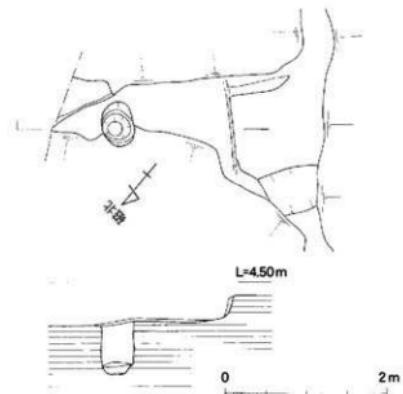


Fig. 4 SC02 (1/60)

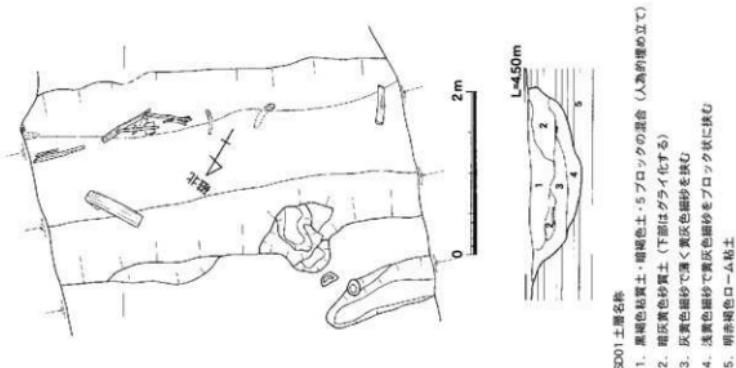


Fig. 5 SD01 (1/60)

10～13は染付小皿。10は1/2片で、復元口径10.8cm、器高1.9cmを測る。内面見込みには比較的淡い青で四区画内に吉祥文様が入る。疊付きは露胎で磨られている。その上には青みがかった透明釉がかかる。11は底部片、底径7.6cmを測る。見込みには草花と蝶が描かれ、体外面には唐草が入る。高台は蛇目凹型高台である。12は角皿底部1/4片で、底径7.2cmを測る。見込みに唐子童子文様が描かれる。疊付きは釉の掻き取りで磨り。13は型打ちの菊皿で、口径13cm、器高3.2cmを測る。見込みに帆掛け舟が描かれる。口唇部には鉄朱による口紅が付く。肥前磁器で19世紀前半から中頃の時期か。14は中型の7寸皿1/3片で、復元口径20.8cm、器高3.2cmを測る。見込みには型紙刷りの草花文様が描かれる。内面にハリ支え痕が残る。焼成は良くなく、釉の発色は悪い。19世紀以降か。15は陶器皿底部片。底径4.0cmを測る。外外面に乳白色釉が厚くかかり、見込みは蛇の目状に釉を掻き取る。釉の発色は余り良くない。肥前磁器で18世紀代か。16は小杯3/4片で、口径7.8cm、器高3.3cmを測る。光沢を持った透明釉が高台疊付き以外にかかり、見込みには金色で富士山と海が描かれる。近代以降のものか。17は色絵磁器で仏飯器1/2片、口径6.0cm、器高4.9cmを測る。赤と緑の2色が用いられている。18は染付の支脚か。脚底径2.7cmを測る。濃紺の文様が描かれる。香炉のようなものか。19は染付の醤油壺か。底径4.2cmを測る。外面には馬の目状文様が5ヶ所に描かれている。体内部から高台内は露胎。20～24は陶器。20は黒釉がかかる湯呑み碗1/3片で、復元口径6.6cm、器高4.3cmを測る。疊付きは露胎で、摩滅している。21は高い高台が付く皿底部片。高台はアーチ状に削りとられる。薄い褐釉がかかる。22は灯火具の秉燭。受皿径5.6cm、上皿径4.9cm、器高4.7cmを測る。器表面には暗赤褐色の鉄釉がかかる。19世紀以降の唐津系か。23・24は同形態の大型の鉢。口径は23が復元33.8cm、24は35.3cm、底径は23が復元13.1cm、24は15.1cm、器高は23が13.1cm、24が13.9cmを測る。いずれも蛇の目状高台で、露胎であり、疊付きは磨られ摩滅する。体外面から内底にかけては灰オーリー、黄褐色釉がかかる。見込みには重ね焼き痕が残る。25は素焼きの七輪の一部。「利三郎製」というスタンプがある。

26～29は近世以前の遺物。26は白磁碗底部1/3片。高高台で復元低径6.0cmを測る。27は須惠器坏身1/5片で、復元口径10.2cmを測る。Ⅲ b～Ⅳ a期頃のものか。28・29は弥生土器。いずれも甕底部で、形態から28が中期中頃、29が前期末～中期前半か。

30～32は木製品。いずれも下層出土。30は山形に加工した板材。縦9.3cm、横5.0cm、厚み0.7cm

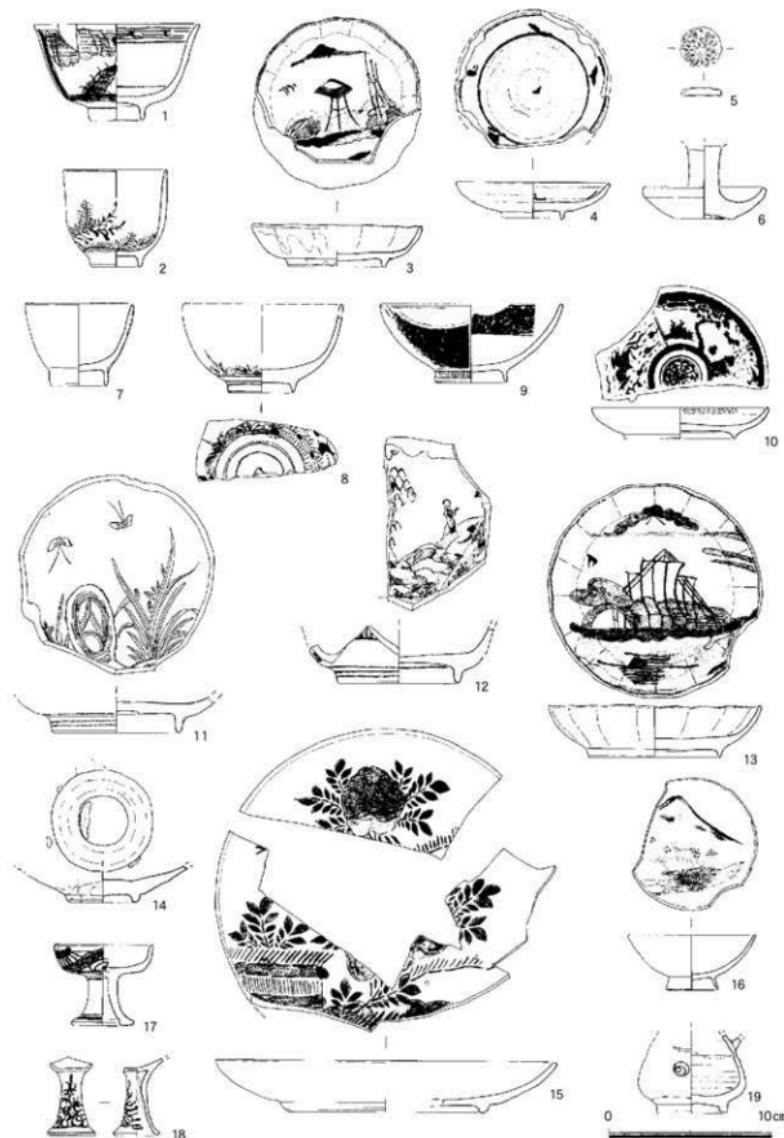


Fig. 6 SD01 出土遺物 I (1/3)

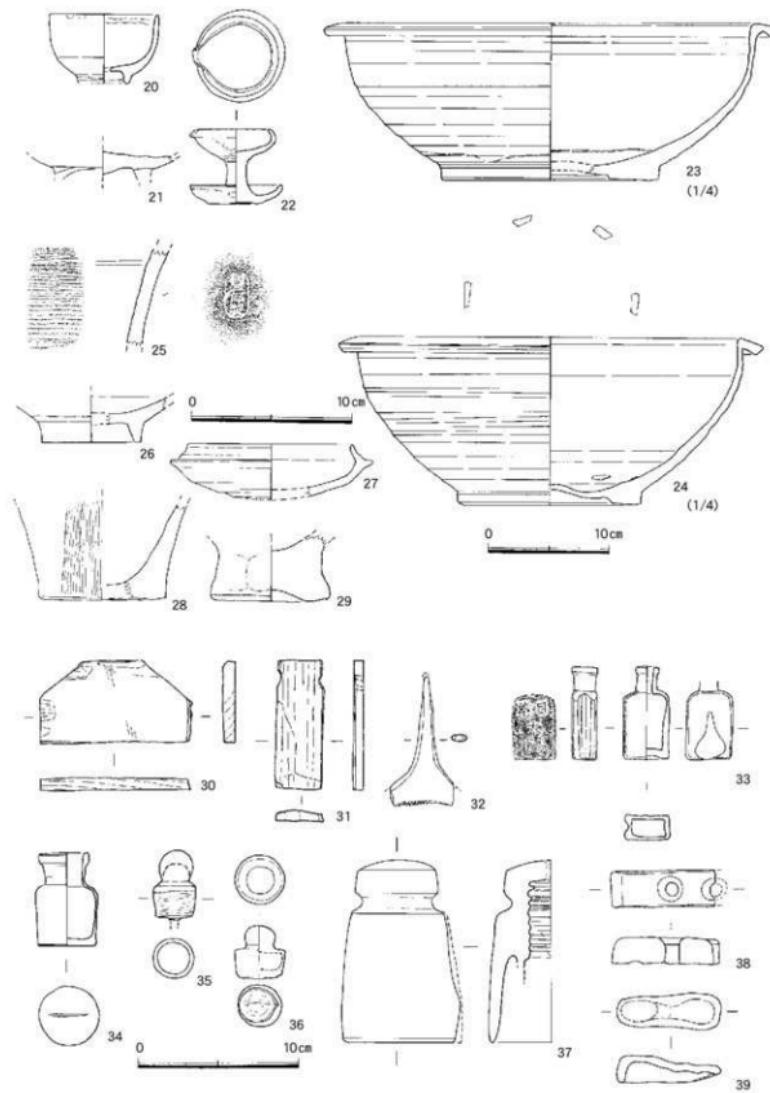


Fig. 7 SD01 出土遺物 II (1/3 · 1/4)

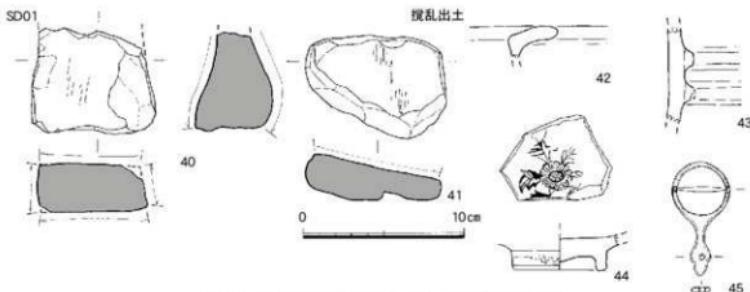


Fig. 8 SD01 出土遺物III、搅乱出土遺物 (1/3)

程である。31は荷札と思われる両側面に切り込みを入れた長方形の板材。縦8.1cm、横2.9cm、厚さ0.6cmを測る。32は櫛で、歯は欠損する。残存長7.9cm、残存幅4.0cm、厚み0.4cmを測る。

33～35はガラス製品で下層出土。33は褐色の目薬瓶で、断面長方形で、高さ5.8cm、幅2.8cm、厚み1.55cmを測る。表面には「目薬太陽」、裏面には水滴、側面には溝が切ってある。製造所は不明、明治後半から大正期の所産か。34は薬瓶と思われる小瓶で、断面は円形、高さ5.8cm、径は3.7cmを測る。通称1オンス瓶か。35・36は蓋である。37は電信柱につく磁器製の碍子片。中層出土。38は磁器製の屋内配線の絶縁物の一部か。いずれも製造メーカーは不明。区画整理以前に使用されていたもので、九州電力以前のもの。39は靴形の素焼きの製品。中層出土。

40・41は砥石片。いずれも石材は砂岩。40は下層、41は上層出土。

③その他の遺物 (Fig. 8, PL. 3)

42～45は搅乱出土。42は弥生中期の甕口縁部細片。43は弥生中期の甕の胴部突帶片。44は中国龍泉窯系の青磁碗底部片。45は黒色の柄と縁枠の虫眼鏡である。

なお碍子などの電気関係部品については九州電力株式会社と日本ガイシ株式会社九州支社の方々、目薬瓶については福岡市博物館学芸員の野口文氏、くすりの道修町資料館にご教示賜った。末尾ではあるが記して感謝の意を表します。



(1) I区全景(西から)



(2) II区全景(東から)



(1) SC02(東から)



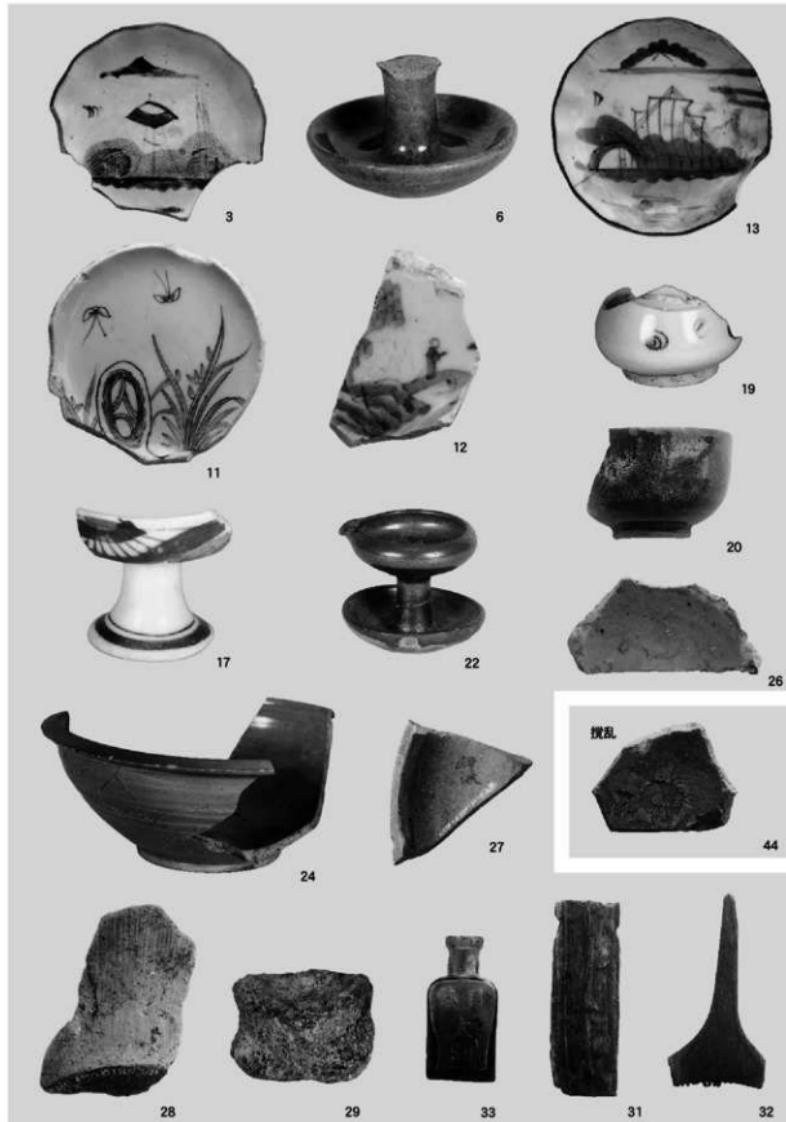
(2) 同東壁土層(西から)



(3) SD01(東から)



(4) 同土層(西から)



各遺構出土遺物（縮尺不統一）

II 五十川遺跡群第9次調査

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経過

平成14年4月5日、地権者の石川サチ子氏より福岡市教育委員会に対して、福岡市南区五十川2丁目220-2、219-4に専用住宅建設のための埋蔵文化財事前調査願いが提出された。申請地は五十川遺跡群内に含まれ、周辺では過去8次に亘る調査が行われ、弥生時代から中世にかけての集落遺跡であることが分かってきている。今回の開発は申請者の敷地の一部が市道御供所井尻線建設用地にかかり、その立退きで住居を解体し、残地に自宅を建て直すためである。調査は急を要したので、国庫補助事業として実施することとなった。

調査は平成14年5月10日の重機による表土除去作業から開始し、5月18日の埋め戻し、20日の機材撤収作業をもって現場調査を終了した。調査実施面積は42m²である。整理・報告書作業は平成15年度に行った。

現地の調査に当たっては、申請者の石川サチ子氏をはじめとして関係の皆様には、調査についてのご理解とご協力を得るとともに、多大なご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

2. 発掘調査の組織

事業主体	石川サチ子		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	生田 征生
調査総括	同	埋蔵文化財課長	山崎 純男
	同	調査第2係	田中 寿生
調査庶務	同	文化財整備課管理係	御手洗 清
調査担当	同	埋蔵文化財課調査第2係	山崎 龍雄
調査・整理作業	揚野浩 沖政芳 清永啓子 久保登喜子	別府俊美 安高邦晴 安高精一 芳野佛二（五十音順）	

第2章 調査の記録

1. 遺跡の立地 (Fig. 1)

五十川遺跡群は福岡平野の中央部を南北に貫流して博多湾に注ぐ那珂川の右岸に立地する。那珂川の右岸には春日市の須玖丘陵から延びてきている低丘陵があり、その先端は博多区の比恵遺跡群あたりまでである。この低丘陵上には須玖遺跡や雑餉隈遺跡群、井尻遺跡群、那珂遺跡群、比恵遺跡群など弥生時代の大遺跡が連続と連なり、奴国の中心地帯となっている。五十川遺跡群はこの低丘陵上に立地し、南側を井尻B遺跡群、北側を那珂遺跡群に接している。五十川遺跡周辺の調査は山陽新幹線建設による調査が最初であるが、古くからの集落で大規模な開発も余りなかった為、発掘調査の件数は少なく、今回の調査で第9次を数えるに過ぎない。しかしこれらの調査から、五十川遺跡群は弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明してきている。

2. 発掘調査の概要 (Fig. 1, PL. 1)

第9次調査区はこの五十川遺跡群の南端に位置し、現地標高は10m前後を測る。調査区は宅地であったが、以前は畠と水田であった。調査は重機による表土除去から始め、排土は調査区西側の道路用地部分に借り置きして調査を進めた。遺構面は約50~60cmの表土下で検出された鳥栖ローム層面であり、その標高は9.4mを測る。遺構面の北側は段落ちする。北側は地表から深さ1.3mを測り、



Fig. 1 調査地点位置図 (1/5,000)

この部分は宅地化する以前は水田であった。

検出した遺構の時期は弥生時代から中世にかけてのものである。主な遺構としては弥生時代と思われる木棺墓、古代から中世の溝3条、円形の井戸状遺構2基、ピットなどである。溝1条は南側の一端低くなつた部分で検出した。狭い調査区や安全上の為、井戸などは底まで完掘出来ず、全容を把握出来なかつた。

出土遺物は総量としてコンテナ3箱ほどで量としては少ない。弥生土器、古代瓦、中世の土器や中國産輸入陶磁器、石器類少々である。

3. 遺構と遺物

①木棺墓（SK）

SK03 (Fig. 3, PL. 2) 調査区北側で検出した長方形のものである。主軸を略東西に取る。規模は長軸1.24m、短軸長0.6m、深さは0.3mを測る。両小口部は一段掘り込みがあり、東側小口には長さ50cm、幅20cm弱の板状の花崗岩の石材が立てられていた。恐らく西側にもあったと思われる。断面を見ると両端に地山ローム土が貼りつき中央部に黒褐色土が落込んだような状況を示し、両側に棺材が据えられていたような状況が見られることから木棺墓であろうと判断した。副葬品などはなかった。

出土遺物 (Fig. 5) 1は弥生土器の底部片で底径は7.2cmを測る。器表面は摩滅し残りは悪いが、ナデか。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。形態から前期の時期であろうか。この



Fig. 2 第9次調査区遺構全体図 (1/200)

他に土器の細片が7点などが出土している。

②土坑（SK）

SK06 (Fig. 4, PL. 2) 西壁 SD01 内で検出した楕円形状の土坑で、長径 1.0 m を測る。深さは完掘していないが北壁から 1.3 m を測る。埋土は粘性が強い黒褐色粘質土が主体であるが、締まらずざつと埋めた状況を示す。湧水があり形態から井戸の可能性がある。

出土遺物 (Fig. 5・6, PL. 3) 赤焼けの須恵器細片や竈泉窯系青磁碗や錢貨、黒曜石片、不明土器片が出土している。

2 は竈泉窯系青磁碗底部 1/3 片で、復元高台径は 5.8 cm を測る。見込みにはヘラ切りの花文が入る。高台内は削りで露胎であるが、その他は灰オーリーブ釉は厚めにかかる。胎土は精良で、焼成は良い。

19・20 は中国の北宋銭である。19 は元豐通宝で初鑄年 AD1078 年で、かなり傷むが直径は 2.2 cm を測る。20 は聖宋元寶で初鑄年 AD1101 年である。直径は 2.3 cm を測る。この造構が井戸であれば、埋め戻し時の祭祀の可能性がある。

SK08 (Fig. 4) 調査区東壁で検出した楕円形状の土坑。壁面にかかったため完掘はしていない。壁面での規模は 1.35 m、深さは北側から 0.9 m 以上を測る。SD01 の下面から検出している。埋土は暗褐色粘質土で、地山ロームブロックを多く含む。埋土は余り締まらず、堆積状況から人為的に埋められたと思われる。埋土の具合から中世か。

出土遺物は須恵器の壺の細片など弥生時代から古墳時代の細片が 4 点出土している。

③溝状造構（SD）

SD01 (Fig. 4, PL. 2) 南側の段落ち部を SD01 とする。南北方向に延びる溝で幅は上面で 4.6 m 以上深さは 0.4 m 程度である。この段落ち部の南側で更に一段下がる溝があり、その幅は 2 m 以上、深

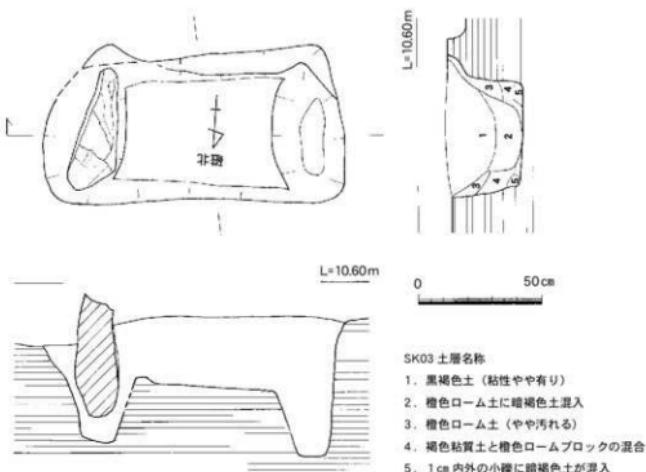


Fig. 3 SK03 (1/20)

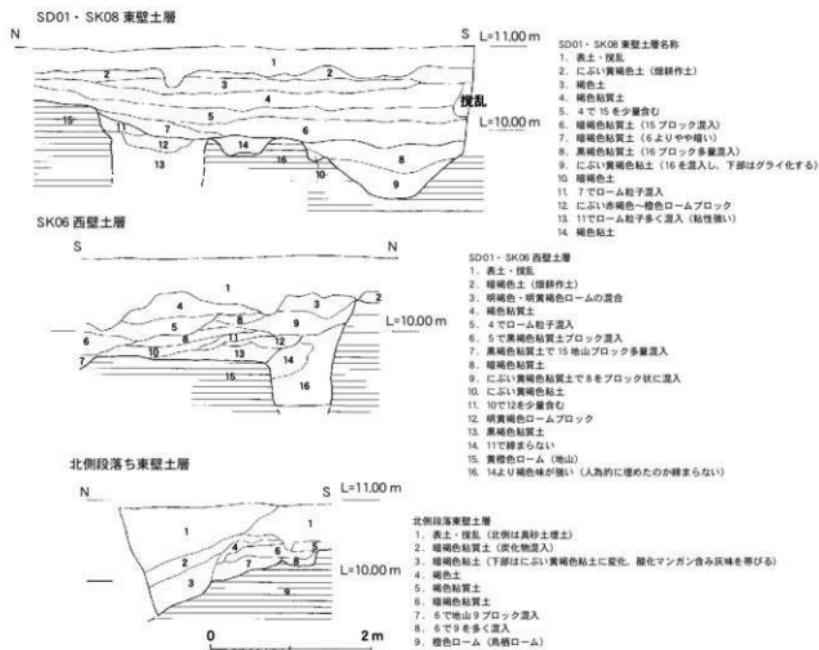


Fig. 4 各壁土層図 (1/60)

さは0.7mを測る。この溝の断面は逆台形を呈する。本来の溝はこの下部の溝の可能性がある。隣接する道路部分の調査で溝の概要が判明するのである。埋土は上部段落ち部が褐色粘質土と暗褐色粘質土で地山ローム土を含む。下層溝の上部は黒褐色粘質土で黄褐色ローム土を少量含む。下部はにぶい黄褐色粘土ブロックで黄褐色ロームブロックを含み、底に近い程グライ化して灰味を帯びる。土の混ざりが人为的に埋めた様な状況を示す。

出土遺物 (Fig. 5・6、PL. 3) 上層から下層にかけて弥生土器から中世の輸入陶磁器まで出土しているが、出土量としては余り多くないが、比較的上層部分の出土が多い。

3～7は上層出土。3は玉縁口線の白磁碗口縁1/8片で、復元口径15cmを測る。見込みから体外部上半にかけて灰オリーブ釉が厚めにかかるが、外表面ビンホール状の気泡が入る。4は施釉陶器の瓶底部1/4片で、底径6.0cmを測る。底部は高台状を呈すが、外面は削りを加えている。内面には薄い透明釉がかかる。色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成はやや不良。5は陶器の無頭壺口縁部1/8片。口縁部は僅かに直に立上り、その復元口径は19.6cmを測る。ロクロ成形によるナデ痕が明瞭に残る。色調はにぶい赤褐色を呈すが、外面には自然釉がかかる。胎土は黄灰色で白色粒子を含む。6は土師質土器の鉢底部片。復元底径は15cmを測る。表面は摩滅するが、5本単位の摺目が残る。器壁の

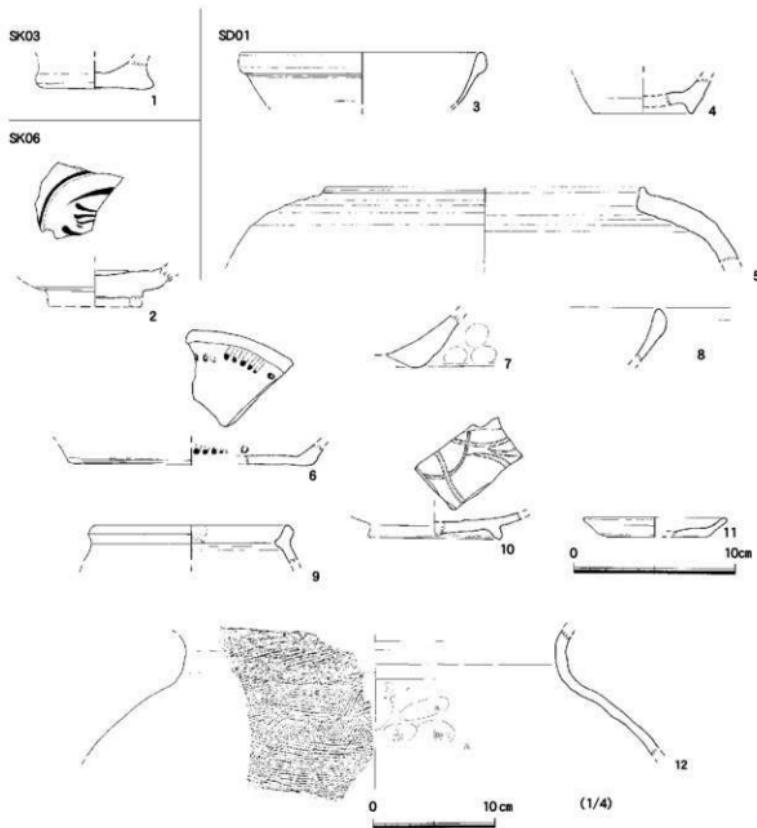


Fig. 5 SK03・06 出土遺物、SD01 出土遺物 I (1/3・1/4)

色調は二次的被熱を受けたようで、にぶい赤橙色から褐灰色を呈す。瓦質土器の可能性がある。7は土師器底部細片。外面指押さえ痕が残るが摩滅がひどく調整は不明。色調はにぶい黄橙色。胎土は粗砂を少し含むが精良、焼成はやや不良。

8は中層出土の瓦質の捕鉢かこね鉢と思われる口縁部細片。調整は摩滅がひどく不明。色調は灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや不良。13・14は古代の須恵質の瓦。13は平瓦片。表面は摩滅が著しいが凸面は格子状の叩きで、凹面には布目痕が残る。厚みは1.8～2.2 cmを測る。色調は灰色で、胎土は精良。14は丸瓦片。厚みは1.7 cmを測る。全体に表面は摩滅するが、凹面には細かい布目痕と斜めの糸切り痕が残る。色調は灰色を呈し、胎土に粗砂を多く含む。

9～12・15～17は下層出土。9・10は越州窯系青磁か。9は青磁の壺口縁部細片。復元口径は

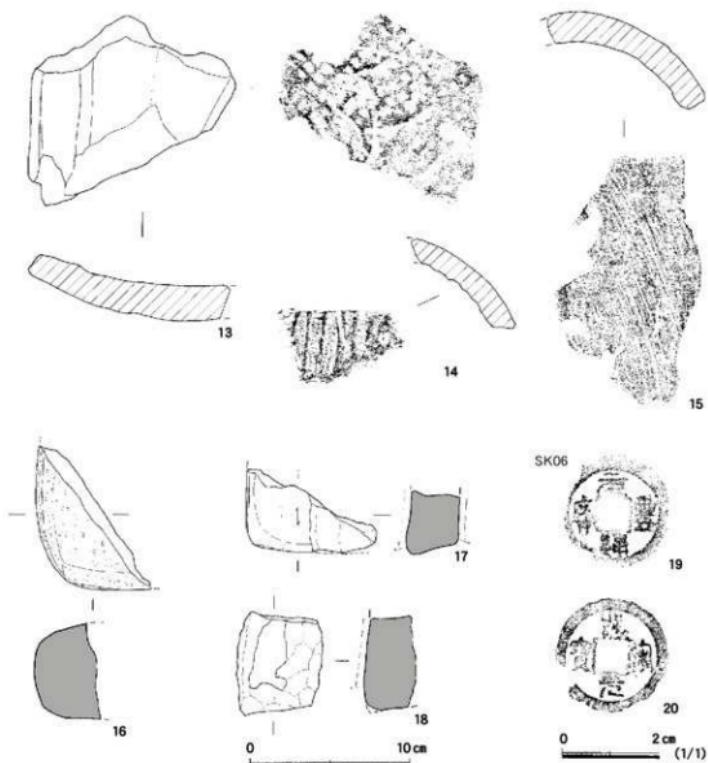


Fig. 6 SD01 出土遺物Ⅱ、SK06 出土遺物 (1/3・1/1)

11.8 cm を測る。にぶい黄色釉が薄めにかかり、口縁部内面には目痕粘土が残る。胎土は灰色で精良。10は皿底部 1/4 片で、復元底径は 8.2 cm を測る。見込みにはヘラによる文様が入る。内外面かなり摩滅するが、にぶい黄色釉がかかる。高台内には目痕粘土が残る。胎土は灰色で、焼成はやや不良。11は土師器小皿 1/4 片で、復元口径 8.8 cm を測る。表面はやや摩滅するがナデで、底部は糸切り。色調は橙色を呈し、胎土には赤色粒子を多く含む。12は中世の国産の須恵質土器甕頸部から肩部片。頸部外面は粗い斜めハケ、体部は平行叩きに粗いハケを加える。内面は当て具痕が残る。色調は灰オリーブを呈し、焼成は良好。15は土師質の丸瓦細片、厚みは 1.3 ~ 1.5 cm を測る。表面は摩滅するが、凹面には細かい布目痕がある。色調は淡黄色で、胎土に粗砂粒を多く含む。焼成は不良。16は磨石片。玄武岩の石材で、各面使用により磨り減っている。残存長径 9 cm、短径 7 cm、厚み 6 cm を測る。18は砥石片で、石材は砂岩である。上下面、左側面は砥面として使用されている。残存長径 8.1 cm、短

径5cm、厚み3.2cmを測る。17は出土層は不明の砥石片。表面の欠損はひどいが、残存長径6.4cm、短径5.3cm、厚み3.2cmを測る。比較的目が細かく中砥石か。色調はにぶい褐色を呈し、二次被熱を受けているようである。

SD02 調査区東側を南北に延びるSD01を切る小溝。幅は0.5から0.6mで、深さは10～20cm程度である。埋土はやや暗い褐色土である。

出土遺物は弥生土器から古墳時代・古代の須恵器、中世の土器片が少量出土している。

SD04 調査区中央を東西に延びる小溝。残りは不良で、規模は幅0.4m、深さは3～6cm程度である。埋土は締まらない暗褐色土である。

出土遺物は須恵器や土器の細片が2点出土している。

4. 小結

今回検出した遺構についての詳細な考察は、狭い調査区の為なかなか出来ないが、時期については出土遺物から見ておよそ弥生時代前期から中世の時期のものがある。過去の調査事例でもほぼ同様の時期の遺構が確認されている。古代の瓦が少量出土しているが、南側の井戸B遺跡群では古代の寺院の存在が想定されているので、それと関連があるのであろうか。近い将来、西側の御供所井戸線道路部分の調査が行われる予定があるので、今回の調査地点で検出された遺構についての時期・性格については、より明確に判明するであろう。



(1) 調査区遠景(南から)



(2) 調査区全景(南から)



(1) SK03(東から)



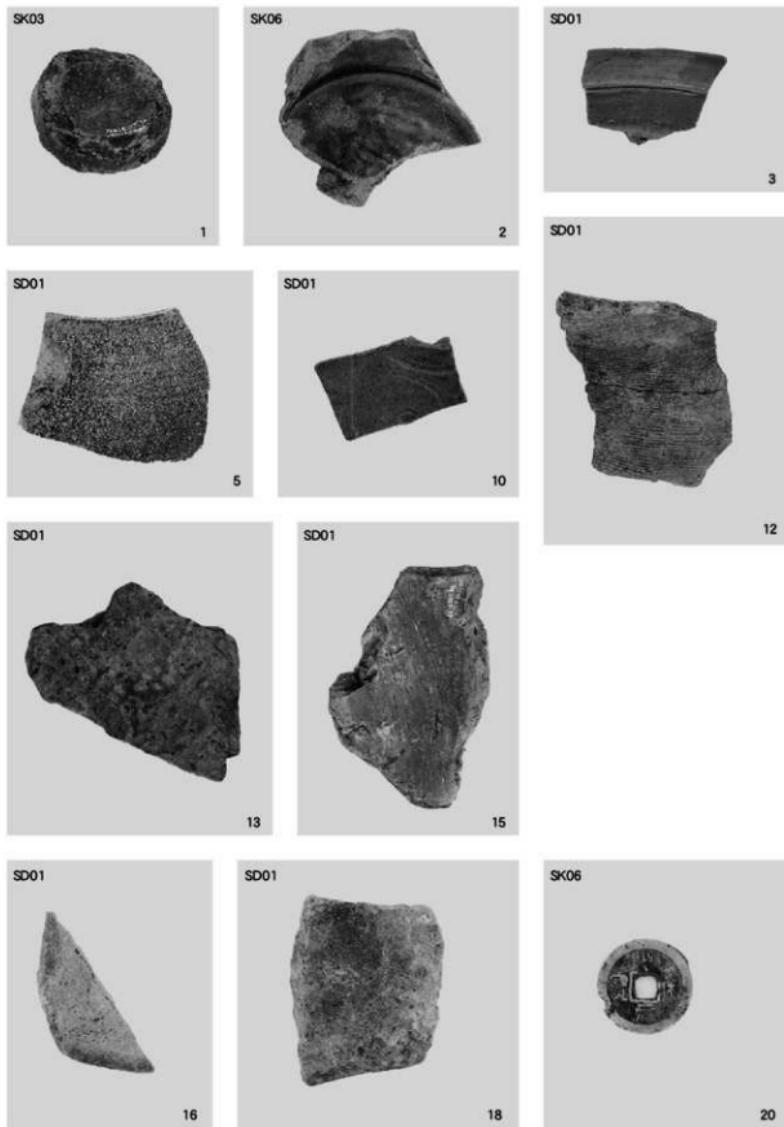
(2) SD01・SK06・08(南東から)



(3) SD01 東壁土層(西から)



(4) 北側段落ち部(南西から)



各遺構出土遺物（縮尺不統一）

ざっしょのくま III 雜餉隈遺跡群第12次調査

第1章 調査の概要と調査体制

雜餉隈遺跡第12次調査地点は博多区昭南町二丁目19番地に所在する。調査原因は個人専用住宅の建設である。調査前の現況は宅地である。調査期間は、平成14年6月18日から同年6月28日までで、調査面積は29m²である。

調査は先ず、重機による表土除去作業を行った。調査開始前に、既に住宅建設用の真砂土が盛り土されており、その結果調査区がさらに狭小になった。この盛り土から約80cm掘削した標高約20.6m付近で遺構面（橙褐色ローム層）を検出した。その後、人力による遺構発掘を行い、順次記録をとった。尚、排土処理の都合上、調査区を東西に二分して反転調査を行った。

検出した遺構は、奈良時代の竪穴住居址3基、土壙1基、ピットなどである。調査区が狭小なため、

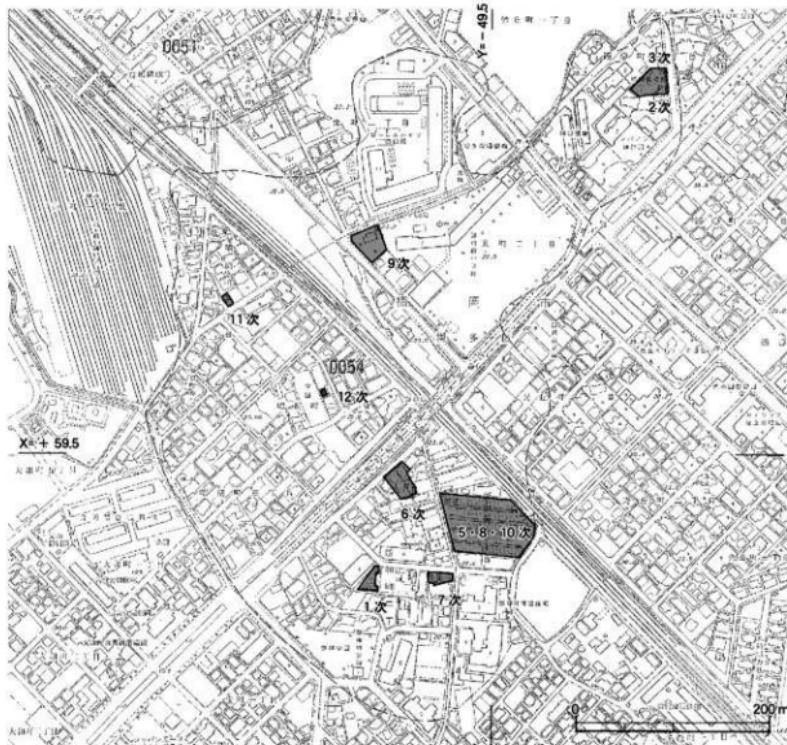


Fig. 1 雜餉隈遺跡群調査地点位置図（縮尺1/5,000）

竪穴住居址は何れもその一部を検出したに過ぎない。また、出土した遺物の総量はコンテナケースに4箱分である。

調査体制

調査委託：瀬戸上義実

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎 純男

同課調査第2係長 力武 卓治（前任）

調査庶務：文化財整備課 中岳 圭（前任）

事前審査：同課事前審査係長 池崎 譲二

同係主任文化財主事 米倉 秀紀

同係文化財主事 田上勇一郎 久住 猛雄

調査担当：同課調査第2係文化財主事 松浦一之介（前任）

調査補助：城門義廣（九州大学学生）

調査作業：草場恵子 近藤澄江 田中雅子 永江陽子 村田敬子 吉村智子

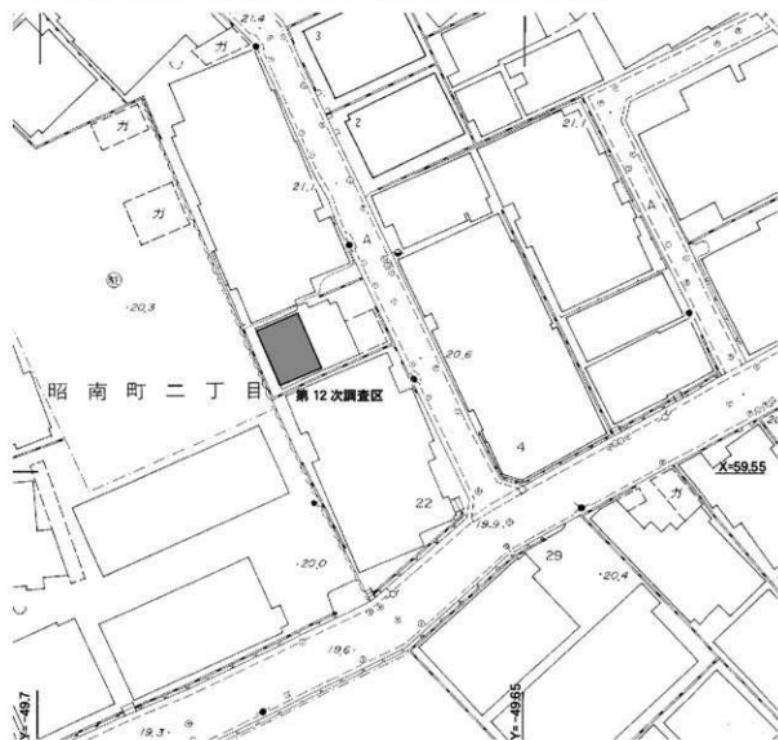


Fig. 2 第12次調査地点調査区位置図（縮尺 1/500）

第2章 調査の記録

1. 遺跡の立地と歴史的環境

雜餉隈遺跡群は、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南端に位置する。地理的には春日丘陵の東辺にほぼ平行して伸びる台地上に立地する。この台地は北西方向から多くの谷が入り込んでおり、数条の舌状台地を形成する。この台地毎に、南八幡遺跡、雜餉隈遺跡、麦野A・B・C遺跡等に分けられている。

雜餉隈遺跡群ではこれまで、奈良時代の大規模な集落址が調査されてきた。これ以前、またこれ以後の集落遺跡は、この時期ほど高密度のものではない。これらのことから、雜餉隈遺跡群における集住の契機は、大宰府・水城・大野城などの国家的規模の土木事業、ないしはその營繕が関係している可能性が高いものと考えられている。

2. 奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構は、竪穴住居址3基、土壙1基、ピットを検出した。しかしながら、調査区が非常に狭小なため、竪穴住居址はいずれもその一部を検出したに過ぎず、不明確な点が多い。遺構は、検出した順に01、02の通し番号を遺構の種類に関係なく付与した。遺構は、数字の前にSで始まる遺構略号と組み合わせて表記している。

(1) 竪穴住居址 (SC)

SC-01 (Fig 4, Pl 3)

調査区西側で検出した。住居址の東辺部のみの検出である。一辺は南北で3.15mを測り、隅丸方形の平面形になると考られる。検出面（標高約20.6m）から深さ15cmで床面に達した。覆土は暗褐色～黒褐色粘質土で炭化物を含んでいた。また住居址の北側の床面直上に、厚さ5～10センチ程度の灰白色粘土が貼られており、竈の痕跡の可能性が考えられる。主柱穴は確認できなかった。床面から須恵器（环・皿）、土師器（环）が出土した。

出土遺物

1はほぼ完成品の須恵器皿で、口径16.5cm、器高2.5cmを測る。底部は回転ヘラ削りの後、ナデ調整を施す。口縁部は緩やかに立ち上がり

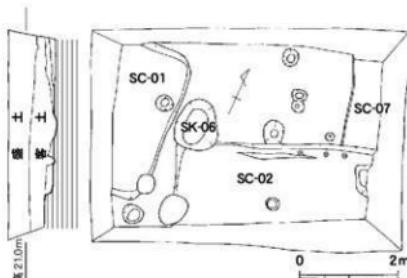


Fig. 3 第12次調査地点遺構配置図（縮尺1/100）



PL. 1 第12次調査地点東半調査区全景（西から）



PL. 2 第12次調査地点西半調査区全景（東から）

り、1ヶ所が片口状に開く。焼成は良好で灰色を呈す。胎土は概ね精良で白色砂粒を含む。2は土師器坏で、口径 13.6 cm、器高 3.8 cm に復元される。体部はやや外反氣味に立ち上がる。焼成甘く、器面の摩滅激しい。胎土には白色砂粒・茶褐色細粒を含む。色調はにぶい橙色を呈す。3は須恵器高台付坏で、口径 13.9 cm、器高 3.8 cm に復元される。高台は低く、底部のやや内側に貼り付けられるが、調整がやや粗雑である。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。胎土には白色砂粒を含む。4は完形品の須恵器高台付坏で口径 13.2 cm、器高 4.0 cm を測る。体部は直線的に立ち上がる。底部回転ヘラ削り調整の後、高台が貼り付けられる。高台は低く僅かに外方に張る。底部の外側に貼り付けられるが、中心からややずれている。焼成は堅致で、色調は灰色を呈す。胎土には白色砂粒を多く含む。5は須恵器高台付坏で、口径 13.4 cm、器高 4.4 cm に復元される。体部は直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反する。高台は低く、底部の外側に貼り付けられ、断面逆台形を呈す。焼成は良好で、色調は灰色を呈

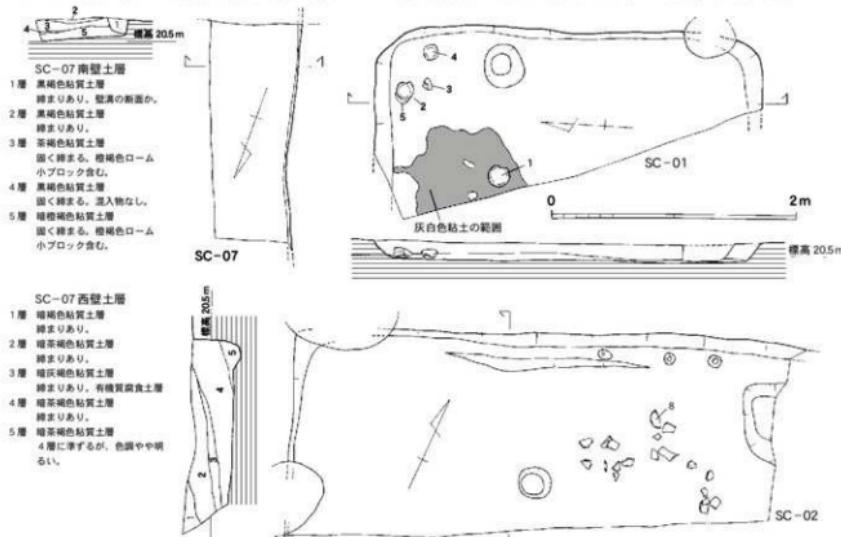


Fig. 4 SC-01・02・07 竪穴住居址実測図及び土層断面図（縮尺 1/40）



PL. 3 SC-01 遺物出土状況（西から）



PL. 4 SC-02 遺物出土状況（南から）

す。胎土は概ね精良である。

SC-02 (Fig. 4, Pl. 4)

1は復元口径14.9cmを測る須恵器蓋である。天井部には回転ヘラ削りを施す。口縁部は僅かに突出し、端部は丸みを帯びる。胎土は概ね精良で、白色砂粒を少量含む。焼成は良好で灰色を呈する。調査区の南側で検出した。住居址の北辺部のみの検出である。SK-06土壤と近・現代の擾乱に切られる。東西一辺が4.0m以上を測り、中形～大形の住居址と考えられる。遺構検出面から深さ約30cmで床面に達した。覆土は暗褐色～暗茶褐色粘質土が堆積しており、土層観察から住居廃棄後の自然堆積と考えられる。北辺部では、一部壁溝が検出された。壁溝の底部では、杭の痕跡と考えられる直径10cm程度のピットを3個確認した。主柱穴は確認できなかった。床面から須恵器(壺・蓋)、土師器(壺・高壺・瓶)などが出土した。

出土遺物

6は須恵器蓋で、口径15.3cmに復元される。天井部には回転ヘラ削りを施した後、ナデ調整する。頂部には摘みの痕跡が残る。口縁部は僅かに突出し、端部は丸みを帯びる。胎土は概ね精良で、白色砂粒を少量含む。焼成はやや軟質で灰色～赤みの灰色を呈する。7は須恵器蓋で口径14.5cmに復元される。天井部には回転ヘラ削りを施した後、ナデ調整する。口縁部はやや外方に突出し、端部は丸みを帯びる。胎土は概ね精良で、白色細砂を少量含む。焼成は堅致で、色調は灰色を呈する。8は須恵器蓋で口径14.9cmに復元される。天井部には回転ヘラ削りを施す。口縁部は僅かに突出し、端部は丸みを帯びる。胎土は概ね精良で、白色砂粒を少量含む。焼成は良好で灰色を呈する。9は須恵器蓋で、口径12.4cm、器高2.5cmを測る。天井部には回転ヘラ削りの後、ナデ調整する。天井部には低いボタン形の摘みが付く。口縁部は僅かに突出し、端部は丸みを帯びる。胎土はやや粗く、白色細砂・粗砂を多く含む。焼成は堅致で灰色を呈する。10は須恵器蓋で、口径14.0cmに復元される。天井部には回転ヘラ削りを施した後、ナデ調整する。口縁部は下方に短く突出し、端部はやや丸みを帯びる。

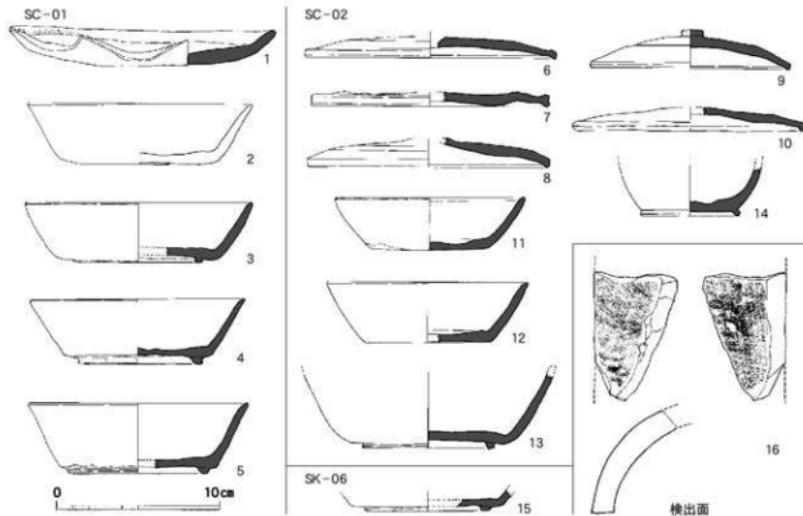


Fig. 5 第12次調査地点出土遺物実測図(縮尺1/3)

胎土には黒色細粒、白色砂粒を含む。焼成は堅致で、色調は灰色を呈する。**11**は須恵器坏で、口径11.5cm、器高3.3cm、復元底径7.2cmに復元される。体部はやや内湾気味に立ち上がる。焼成がやや甘く、色調は黄みの灰色を呈する。胎土は概ね精良で白色細砂を含む。**12**は須恵器坏で、口径12.3cm、器高3.7cm、復元底径7.8cmに復元される。体部は直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。底部には回転ヘラ削りの後、ナデ調整する。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。胎土は概ね精良で、白色細砂を含む。**13**は須恵器高台付坏で、底径7.3cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。底部回転ヘラ削り調整の後、高台が貼り付けられる。高台は非常に低く外方に張る。底部のやや内側に貼り付けられる。焼成はやや甘く、色調は黄みの灰色を呈する。胎土には白色砂粒を含む。**14**は須恵器頸壺の底部片と考えられ、底径5.6cmを測る。底部回転ヘラ削りの後、短い高台が底部の外端部に貼り付けられる。焼成は堅致で、色調は灰色を呈する。胎土は概ね精良である。

(2) その他の出土遺物

15はSK-06土壤出土の須恵器高台付坏の底部片である。高台は低く、底部のやや内側に貼り付けられる。**16**は検出面出土の丸瓦片で、外器面には縄目叩き、内器面には布目痕が残る。焼成がやや甘く、色調は黄みの灰色を呈する。

3.まとめ

上記した出土遺物の年代観から、SC-01は8世紀前半、SC-02は8世紀後半代の所産と考えられる。雑餉隈遺跡群では、広範囲にわたって奈良時代の集落址が展開しているが、本調査区でもそれを補充する成果が得られた。雑餉隈遺跡第5・8・11次調査報告で行われた古代住居址の類型によると、SC-01はII類、SC-02はIIIもしくはIV類（一辺が4mを超えるのでIV類の可能性が高い）に分類でき、居住者には、SC-01が集落の一般構成員、SC-02に有力者層が想定される。

検出面では丸瓦片が1点出土しているが、本調査区では瓦を葺くような建造物跡は検出されておらず、また官衙等の施設を想定させる遺物も出土していない。本調査地点から北へ約150m離れた雑餉隈遺跡9次調査地点では、7世紀末～8世紀初頭と考えられる大型掘立柱建物跡（2×4間以上1棟、2×5間以上1棟）が検出された。第9次調査地点では瓦が出土していないが、建物規模からして瓦葺建物であった可能性がある。また周辺に官衙関連施設の存在が想定されており、出土した丸瓦片はこれらとの関連が想起される。

IV 那珂遺跡群第 87 次調査

第1章 はじめに

1 調査にいたる経過

2003年1月17日に黒田哲夫より、共同住宅の建設に先立ち、福岡市博多区東光寺1丁目376番3地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は那珂遺跡群内に位置していることから、埋蔵文化財課で申請地内における試掘調査を行った。その結果、浅いところでは現地表面から約20cmで鳥栖ローム面となり遺構が確認された。この成果をもとに協議を行い、切り下げが行われるサービスヤード部分においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。発掘調査は2003年1月31日～2003年2月4日の間に行った。

2. 調查体制

調査委託 黒田哲夫

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田 征生

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎 純男

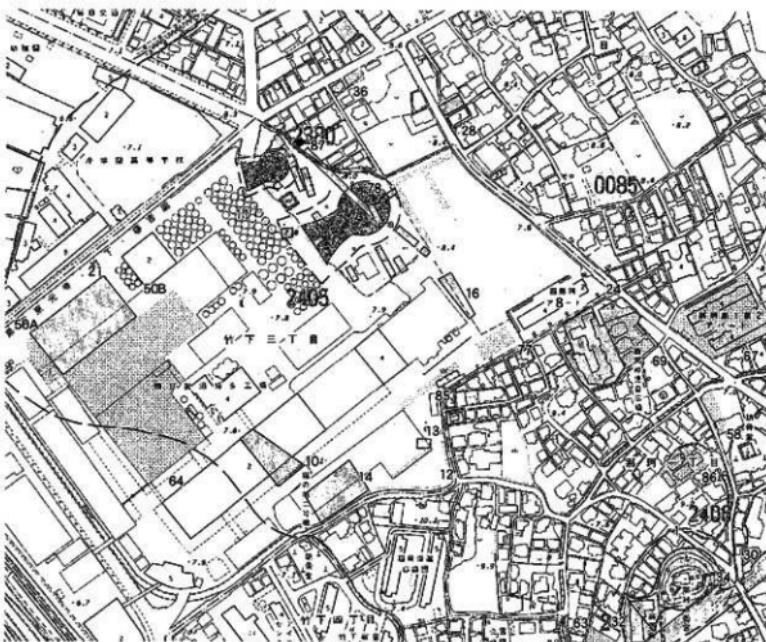


Fig. 1 周辺の調査地点 (1/4,000)



Fig. 2 調査区の位置 (1/400)

調査第2係長 田中壽夫

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

事前審査 田上勇一郎 久住猛雄

調査担当 試掘調査 久住猛雄 本田浩二郎

発掘調査 井上蘭子

調査作業 泉本タミ子 志堂寺堂 柴田博 漢地静子 北条こず江 森本良樹

整理補助 谷直子 (九州大学大学院)

整理作業 川田京子 佐々木涼子 馬場弓子 福島由衣子 山口とし子

このほか、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について黒田哲夫様他関係者の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

第2章 調査の記録

1. 遺跡の立地

那珂遺跡群は福岡平野の中央部、那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に位置する。この丘陵は花崗岩風化層を基盤とし、Aso4起源の噴出物である八女粘土、鳥栖ローム層などを最上部とするものであり、春日市須恵岡本遺跡丘陵の先端付近から、福岡市博多区博多駅南付近の比恵遺跡まで島状に分布している。台地の東西と南側は沖積地であり、2km先の博多遺跡群が立地する砂丘との間は後背湿地となっている。遺跡の範囲は南北約2.0km、東西0.7kmで、現在の標高は約7~10mである。

那珂遺跡群は現在までに94次の調査が行われている。本調査地点は那珂遺跡群の北西付近、東光寺剣塚北古墳の後円部東に位置する。東には第89次調査地点が位置し、斐棺墓群が検出されている。

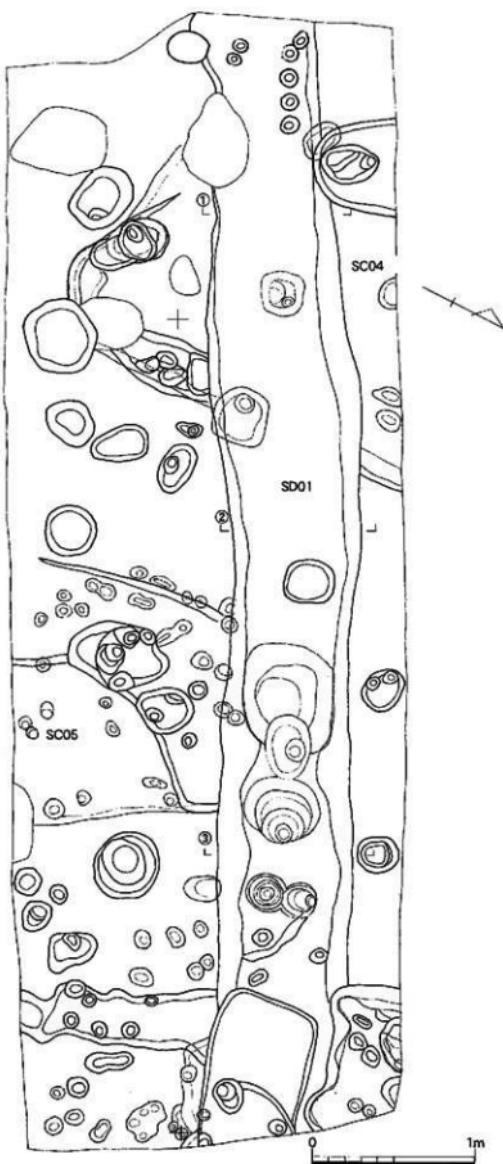


Fig. 3 遺構平面図 (1/30)

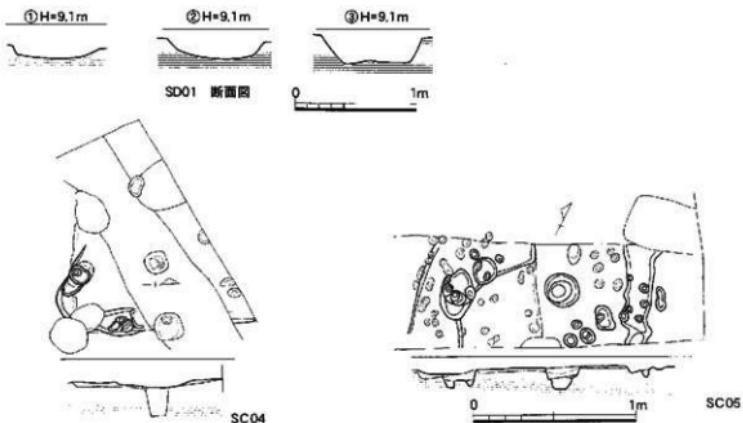


Fig. 4 溝・住居址実測図 (1/40, 1/30)



Fig. 5 SC05 出土滑石製石丸玉実測図 (1/1)

2. 遺構と遺物 (Fig. 3・4・5)

遺構面は現地表下約30cm、標高約8.9～9.1mの鳥栖ローム上面で検出された。遺構面は北東から南西へ向かい傾斜して落ちる。検出遺構は溝1条、竪穴住居2軒、その他、ピット、土坑である。

SD01

幅約75～90cm、延長約7m、深さ10～20cmを測り、N-62.3°-Eの方位をとる。出土遺物は小片で図示できないが、上師器、須恵器などが出土しており、古墳時代～古代と推定される。

SC04

調査区西側の北壁に切られている。柱穴は不明であるが、周溝状の溝や貼床が一部残ることから、方形を呈する住居址ではないかと考えられる。出土遺物は小片で図示不可である。

SC05

調査区東側、南壁に切られている。主柱穴2基が検出されている。貼床をはがすと小穴が多数検出された。平面は方形を呈するものと思われる。出土遺物は少ない。

その他、遺構検出中に滑石製の石丸玉が出土している。径約5mm、厚さ約3mmを測る。

3. まとめ

本調査地点では、古墳時代～古代の溝、弥生時代～古墳時代に属すると推定される竪穴住居が検出され、当該時期の集落の一端を示していると考えられる。特に、北東へ向かい遺構面が高くなり、集落は北東へ延びてゆくと推定される。



(1) 調査区全景（東から）



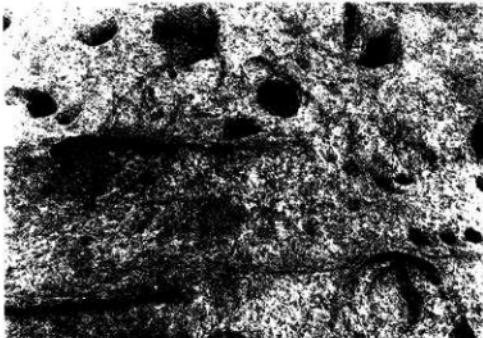
(2) 調査区全景・貼床除去後（東から）



(3) SC05（北から）



(4) SC05・貼床除去後（北から）



(1) SC04 (北から)



(2) SC04・貼床除去後(北東から)



(3) 調査作業をされた方々

報告書抄録

ふりがな	ちゅうなんぶ						
書名	中南部(7)						
副書名	—福岡市博多区・南区所在遺跡の調査						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 793 集						
編著者名	山崎龍雄／松浦一介／井上繭子						
発行機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2004(平成16)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
比恵遺跡群 第 68 次	福岡県福岡市 博多区博多駅南 3 丁目 3-33	40132	0127	33° 34° 45°	130° 25° 44° ～	19990517 19990618	284 共同住宅建設
五十川遺跡群 第 9 次	福岡県福岡市南区 五十川 2 丁目 220 -4, 219-4	40134	0088	33° 33° 16°	130° 26° 30° ～	20020510 20020520	42 個人住宅建設
雜削隈遺跡群 第 12 次	福岡県福岡市 博多区昭南町 2 丁目 19 番地	40132	0054	33° 32° 14°	130° 27° 55° ～	20020618 20020628	29 個人住宅建設
那珂遺跡群 第 87 次	福岡県福岡市 博多区東光寺 1 丁目 376 番 3 地内	40132	0085	33° 34° 15°	130° 26° 04° ～	20030117 20030204	20 共同住宅建設 (サービスヤード部分)
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
比恵遺跡群 第 68 次	集落	弥生	弥生 堅穴住居 1 棟	弥生土器・石器・須恵器・中国産磁器			
		近代	近代 溝 1 条	近世～近代陶磁器・木器・ガラス製品			
五十川遺跡群 第 9 次	集落	弥生 中世	弥生 木墳墓 1 基 中世 溝 3 条、井戸 2 基 近代 段落ち	弥生土器・石器 中世土師器・中国産陶磁器・国産陶器・古代瓦、中国鏡			
雜削隈遺跡群 第 12 次	集落	奈良	奈良 堅穴住居 3 棟 土壙 1 基	須恵器・土師器 古代瓦片			
那珂遺跡群 第 87 次	集落	弥生 ～ 古代	古墳～古代 溝 1 条 弥生～古墳 堅穴住居 2 棟	滑石製石丸玉			

座標度・経度は日本測地系による

中南部 (7)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 793 集

2004年(平成16) 3月31日

発 行 福岡市教育委員会
 〒 810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 の 1
 印 刷 未松印刷株式会社